

資料渉猟余話

その121

三月廿七日 午前九時四十分、追悼号に投稿する追遂に永眠せらる。

三月廿九日 午後一時、高木の『山房漫語』の著作

は、九月一日に赤彦の追悼号に投稿する追遂に永眠せらる。十月九日に赤彦著『山房漫語』の著作

師島木赤彦と弟木下右治

〜若き日の木下の日記から③〜

鎌倉 貞男

あろうことか、こ田先生危篤。いろいろの半年後、赤彦は死る用事あり。高木への床に就き、永遠に「来たれ」とのこと。帰らぬ人となった。て、急ぎ厚飯をたべ

三月廿五日 原田来たり「久保状態にてをらる。」

三月廿六日 一日一夜、こん睡

その後の日記に

日記は、重苦し

目すべきは赤彦の追悼歌会であろう。

その歌会は十月十日に行われた。前日は、木下他五人が詠草の整理を行っ

た。以下が、当日の日記である。

以下、細かい字で

ら、十八点を得て

赤彦の教碑のめぐり教り教り
松葉はあかき土肥の浜べよ

木下右治の書軸

過ぐるものありて秋とそなりぬ

高田浪吉

おのが胃のしこりの上ゆ触りつつさ

ひしかりけむ君し

平福百穂

うつつ身を生きのこりつつ春山のこ

の寂しさに堪えざ

らめやも

斎藤茂吉

おちつかぬ思ひし

境は進み、長足の

進

歩を遂げていたと言

追悼会に来る。

こつして木下は偉

大な師島木赤彦と永

訣した。アララギに

入会して五年、直接

赤彦に指導を受けて

から一年半後のこと

つても過言ではある

まい。

次は、翌十月十七

日の日記である。

正午より正願寺に

於て赤彦先生の追悼

会をなす。甚だ盛會

なり。読経、焼香終

りて、追憶談に入

る。斎藤博士・土田

耕平・藤沢古実氏な

ど話す。それより高

木へ墓参に行く。下

伊那より清水義穂君

追悼会に来る。

こつして木下は偉

大な師島木赤彦と永

訣した。アララギに

入会して五年、直接

赤彦に指導を受けて

から一年半後のこと

だった。しかし、こ

の短かく、凝縮され

た時間と体験こそ、

歌人木下右治のハッ

クポーンを形成し、

その将来を決定づけ

たように思える。な

ぜなら『飯田下伊那

アララギヒムロ史』

(木下右治編)や

『方丈の庭』(木下右

治著・木下秋彦編)

等に明らかな通り、

歌歴五十有余年にも

及ぶ彼の作歌生活と

活躍はここから始ま

るからである。

最後に、父君の没

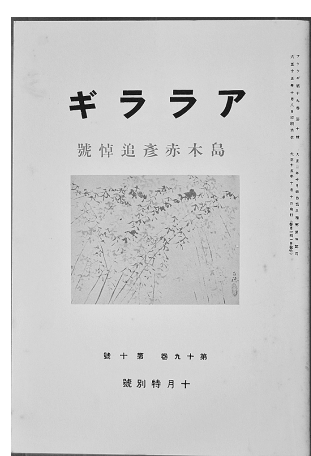
後、右の二書を発刊

された故木下秋彦先

生の深き学恩にも感

謝しつつ筆を擱く。

(故人敬称略)



島木赤彦アララギ追悼号